

地域のためお客様のために一途な仕事で応える

## 有限会社 鹿山電気商会



「有限会社鹿山電気商会」は、代表の鹿山真広さん（深谷）の父・眞明さんが、昭和38年に創業した設備工事業の会社です。平成9年に法人化し、同時に真広さんが代表となりました。

当初は家電販売が中心でしたが、水道設備業、住宅の電気設備業と事業を拡大し、村のライフラインを支えてきました。

「子ども達が小さい頃は店が遊び場でした。店に立ち寄った方とコーヒーを飲んだり話したり、そんな日常がありました」と振り返るのは共に会社を盛り立ててきた妻のあや子さん。



令和2年に完成した現在の社屋。

その子ども達も現在は会社を支える存在になりました。大学卒業後に入社した長男の真史さんと妻の美希子さん、次男の真之さんは震災前から。その後に長女の鈴木里美さんも入社し、業務を担っています。

「生活が整う前に仕事が始まっていた」という多忙な日々でしたが、福島市に拠点を確保し、資材置き場を借りて乗り越えました。令和2年2月には村に新社屋が完成。隣接する資材置き場も建て替えました。

現在も、村のインフラに関わる業務を担い、一方で広域な現場を持ちながら、「お客様ファースト」の丁寧な仕事を貫いています。法人化から間もなく30年。真広さんは歩みを振り返り「村の役に立てる仕事を子ども達に託していきたい」と穏やかに話していました。



飯館村管工事組合を介して浄水場の施設の清掃業務なども行っています。

有限会社鹿山電気商会  
飯館村深谷字二本木前23-1  
☎0244-42-0032

令和4年の『第4回電気工事技能競技全国大会』で、福島県代表として出場した真史さんが優勝し、金賞・経済産業大臣賞と『ジャパンeスキルチャンピオン』の称号を手に入れました。写真は受賞時のスピーチの様子。優勝者の役目で、2年後の第5回大会ではポスターのモデルを務めました。



## ふれ愛館だより

交流センター「ふれ愛館」からのお知らせです。

二十歳の皆さんに贈る  
「はたちの20冊」を制作しました



今年も一般財団法人出版文化産業振興財団（JPIRC）のご協力のもと『はたちの20冊』の冊子を制作し、1月に行われた「飯館村二十歳の成人式」の出席者に、本を贈りました。

『はたちの20冊』は、20歳を迎えた方はもちろん、大人の方にもおすすすめの本が紹介されています。また、紹介されている20冊は、交流センターで貸し出しを行っています。ぜひ手に取って、新しい本との出会いのきっかけにしてみてください。



写真は二十歳の成人式の実行委員会の皆さん。『はたちの20冊』の図書を手に入。

## 歴史の散歩道

### 餅の文化

暮らしを彩る節目のご馳走

飯館村には、正月の餅の他、節句の餅、川入り餅、お盆の餅、秋餅など、年間を通じてさまざまな節目に餅をつく習慣がありました。ついた餅は神仏に供え、特別なご馳走として家族で味わいました。

川入り餅とは、乾燥・保存したヨモギを入れてつく餅で、「水に入っても浮き上がるように」と食べるならわしでした。

秋餅は新米でつき、あんこ餅、つゆ餅、きなこ餅などにして、餅づくしの食事を楽しましました。また、親戚や農作業を手伝った家に「升餅を持参し」「餅振る舞い」をしました。嫁がこの餅を持つて実家に帰る習慣もありました。

特別なハレの日の餅つきは、手製の「手つ杵」で「よい

しょよいしょ」とかけ声をかけてつきました。短い杵で、つき方が早いので、こねどりが大変でした。

正月の餅つきに合わせ「もやし飴」もつくられました。粟にもち米を少量混ぜて煮て冷まし、石臼でひいた大麦の粉を入れ一日置いて袋でこしました。これをとろ火で煮つめると完成で、餅に付けて食べたそうです。

冷害に見舞われ食べ物に恵まれない年も多かった飯館村ですが、餅のなわらしにあるように、工夫を凝らし想いを込めてまていな食文化を紡いでいました。

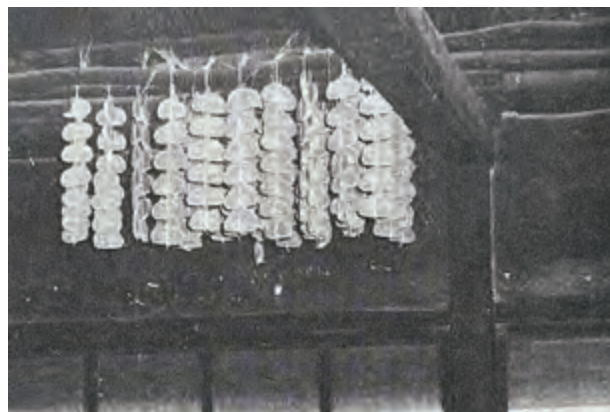
現在栽培を推進しているもち米「あぶくまもち」の加工にもその伝統は受け継がれています。

参考：飯館村史第3巻「民俗」



全村避難の期間にも仮設住宅の自治会などが餅つきを行い、村の暮らしを懐かしみ励まし合いました。

平成26年1月・旧伊達東仮設住宅



厳冬期の気候を生かしてつくる凍み餅。家の梁（はり）に下げて乾燥させました。（昭和期の写真）